
わたしのバケモノ



益田 勝実

ひとが亡くなった母の声音をどの時点のなにで記憶しているものか。調査らしい調査があることを聞いていない。だからといって、あの調査統計の表の数字の何百分のひとつに、わたしのそれも化けてしまうだけなら、それもありがたくない。しかし、他人の心の中にあるそれと自分のそれとを比べてみたいような気持ちも
しないではない。

わたしは、母の晩年近く、自分が大陸奥地の戦場から復員してきて、茫然の体で日々を暮らしていたころの、割にふたりだけの時間が多かった日々の、なにからななまでふたりきりの空間でしゃべりあっていたときの、あの声音と、母の子守唄の声とを、もつともよく覚えている。母とわたしの歴史のアルファとオメガ

にあたる部分だから、当然といえば当然かもしれない。

しかし、子守唄の声は、考えてみるとおかしい。唄で寝せつけられていたころの幼いわたしが、どうしてあれを覚えているのか。ほかのその時期の記憶などはないのに。

ねんねんよう、ねんねんよう。

起きたらゴンゴチーにかぶらせる（食いつかせる、の意。）

ぞう。

ねんねんよう、ねんねんよう。

ずっと離れたオトンボの子だから、弟妹に対する子守唄ではない。母は四十二になってわたしを生んだ。ちいさいときなくなつた兄姉を入れると、九番目の子のはずである。ふとんを積み重ね

て、それに寄りかかり、坐って生んだのだという。逆児さかごで、仮死の状態まわいで生まれたらしい。だから、おそらく、わたしあたりが、日本のわたちの坐産の歴史の最後に位置するのではなからうか。

それはそれとして、山口県の下関旧市内、わたしの生まれたあたりでは、おそろしいバケモノのことをゴンゴチーといった。もう少し大きくなって、子ども同士でいて、ふいに相手をこわがらせようとするときなど、うしろから幽霊のように両手をブラリとさせて、ゴンゴチーと襲いかかっていくこともした。

ゴンゴチーのオバケがどんなものか、説明してもらったことはないが、わたしは、それを家から少し離れたところにある赭土山あかどのゴンゴジヤマと勝手に重ね合わせて、了解するようになったのではなかったかしらん。よその子は、わたしのゴンゴチーをゴンゴジーということがあったから、後には、そここのの荒涼とした光景と頭のなかでダブっていった。兄についてタコ揚げにいく時節などは、そここにもぎやかで、人のタコこをからませて、(タコ糸にガラスの粉をソックイ糊かで塗りつけてある。)切り合うなど、活気に満ちていたが、ふだん少人数で水晶掘りにいくときなど、人氣がなくて無気味なところだったから、そう感じたのか。戦後は平らにして町(田中町というところだが)のまんなかになつてしまった。昭和のはじめだって、そこが金剛寺という廢寺

址で、明治の早いころ監獄のあったところなどということ、町の人たちはほとんど知らなかったが、父が地じつきの人間だから、幼いわたしも知っていて、監獄——ゴンゴウジヤマ——ゴンゴチーの連想の輪をひとりで造りあげていたのかもしれない。

十代の終わりになって、『嬉遊笑覽』を『隨筆大成』本で読み、わたしの母のゴンゴチーが、よそにガゴウシというところもあり、元興寺の鬼の意味だと積たかかれていて、啞然あとした。(その本は夕食代がない日売りにいった。)それで、こんどは、『日本国善悪現報靈異記』を、『日本古典全集』の狩谷掖齋の注で読み、大昔、大和飛鳥の元興寺の鐘堂で、よなよな人をあやめていた幽鬼を道場法師が退治した話を知った。戦後、『全国方言辞典』で、宮崎・鹿児島県で妖怪をガゴといい、徳島県美馬郡でガゴジという、とあるのに接し、柳田国男の『妖怪談義』という本が出て、ガゴゼ(兵庫)、ガンゴ(奈良)、ガンゴジ・ガンゴシ(徳島)、ガンゴ・ガガモ・ガンゴチ(愛媛)、ガンゴジ・ガンゴチ(茨城)、ガンゴジ(栃木)など、各地の同系列の語が列挙してあるのを知ってびっくりした。(「妖怪古意」)

元興寺の鬼は、悪心を抱いていた寺奴の死霊が化けて出たことになつている。柳田さんは、全国のガゴジ系の妖怪名詞がそういう一寺院から出て広く分布していることを、すなおには認めない

立場だった。なにかもつと別のそういう広い分布の基盤となった相型を生みだす、古い共通観念がありはしなかったか、と考えている。

母が、「ねんねんよう、ねんねんよう／起きたらゴンゴチーにかぶらせるぞう」「ねんねんよう、ねんねんよう／泣くとゴンゴチーにかぶらせるぞう」とわたしをたたきつけて寝かそうとしていたとき、どんなバケモノの襲来をイメージしていたか、わたしにわかりようがないが、もう少し大きくなると、わたしのほうで勝手にその内容を想像するようになっていた。

母がくりかえしてくれたチンボクボクドノの昔話に出てくる、あのバケモノたちのようなのがゴンゴチーだろう、と思うようになっていく。昔なんでも、ひとりの旅びとが行き暮れて宿を求めた。村びとは、旅の者を泊めることは御法度だが、バケモノが出ていつも人を食い殺す古寺があるが、そこなら貸す、という。勇氣がある旅びとは寺へいき、須弥壇の下に潜りこんでいた。夜が更けると、なにものかがゴットゴットやってきた。「チンボクボク殿、おいででござるか」「どなたでござるか」「フタバノサンメでござるか」。しばらくして、またやってくる。「チンボクボク殿、

おいででござるか」「どなたでござるか」「イッボンアシノコケコでござるか」。そうして、バケモノが大勢寄ってくる。

話の方は、旅びとは仏を念じていて見つからずすみ、夜が明けて、村びとと見とどけておいたバケモノの行くえを追い、墓原で二齒の三目（古下駄）を、やぶの中で一本脚の古鶏を見つけて……というふうにと退治するが、肝心の寺のぬしチンボクボク殿とは何者かがわからない。

最後に、旅びとはふつと考えついて、やにわに寺の大柱を刀で斬りつける。柱から赤い生き血がタラタラと流れる。大柱はツバキの大木でできていた。それで、バケモノなかまで、「樺木々殿」とあがめられていたのだ。ツバキの木にはそういう霊力があるらしい。愉快なことばの判じものの昔話だが、幼いころのわたしには鬼気迫るものがあつた。特に寺の本堂にバケモノのどの顔もどの顔も、母が少女の日たしかにその眼で見たという、ひげむじやらの大男の顔を想像していた。

わが家は、若いころ壇の浦の海沿いに夜道をもどってきて、道のまんなかに立ちはだかる黒い影の大きなバケモノがこわくて、もとの道を還って一泊してきたが、あくる朝そこにさしかかると、なんのことはない大きな枯木だった、という体験者の父と、少女の日、バケモノを見とどけて、バケモノの存在を確信してい

る気丈きじょうな母との組み合わせからできていた。父のバケモノ体験談は、いつも、正体はわかればなんでもないが、男たちがふるえ上っていた、というタイプの話。

明治三十年兵の父は、小倉の歩兵十四連隊の一等卒だった。中隊に夜尿症の兵隊がいて、その病癪と未解放部落出身ということとでいじめぬかれ、軍隊生活をうらんで自殺した。靈安室の屍衛兵しかばねに立った連中は、いじめた戦友だから化けて出るぞ出るぞと思つて鉄砲をもつて立っていた。突然、パチンと鋭い物音、衛兵はみんなワァーッと大声を立てて、外へ逃げ出した。火鉢の炭がはねたのだった。まあ、そういう系統の話が多い。

しかし、裏町という繁華な芸者まちの鳥屋に日が暮れてかしわを買いにいくと、「もうおしまいです。あした来てください」という返事がある。人はだれもいない。調理台の下の鶏が一晩生きながらえたくて、人間の声づくろいをしてそういうのだ、という話など、そこへ鶏肉を買いにやらされるたびに思い出して、気味悪かった。鳥だって、少しでも生きのびたいだろう。発想が真に迫っている。

母の方は、明治十一年生まれだが、萩から一時岩国へ移り住んでいた。岩国の城山近くの空屋敷を借り、離れは漬物置場にしていた、という。まだ五つ六つの少女だった母が、ある日のお茶の

時刻に、オテショウ（小皿）と箸をもつて味噌漬を取りにやらされた。薄暗いその部屋で、樽の中をかきまわしていたとき、膝もとでコトコトと小さい音がした。鼠かと思っていると、コトコトはしだいに大きくゴトゴトとなり、音がだんだん畳の上をはつて向こうの壁の方へ動く。恐しくなつて行くえを見守った。音が壁へとどくと同時に、大きなひげむじやらの男の顔が壁いっぱいに浮かび上った。その時は声が出ず、男の顔が消えたとなんに、ワァーッと大声をあげた、という。

母屋から祖父が廊下を馳けつけたとき、昼なのにちようちんに火をともし下げてきた、というのが、何度聞いても印象的だった。維新前に、その屋敷の主人が、仲間うちうけに髪をゆわせながら、ああでない、こうでないとか叱りつづけた。叱られながら仲間は頭上でアッカンベと舌を出した。それが主人の手鏡に映った。シトシト雨のクレナイ（紅草）の畑に引き出され、打ち首にされた。そういういわくのある屋敷だ、とあとでわかったそうなる。

でも、バケモノより幼いころこわかったのは、子盗り。これは実在すると信じて疑わなかった。現に連れていかれた子どもたちが曲馬団にいるではないか、とくりかえしていわれていたから。あれは今の若い娘さんにとっての妖怪チカンのごとく、わたしにとって、敵然と存在していたおそるべきものだった。（法政大学）